# 立教大学司書課程へ、実習を経て、今思うこと

今橋　萌（文学部文学科日本文学専修）

「司書」とは何をしている人なのか。大学で司書課程を履修していると、多くの人にこの質問をされます。「司書」＝「図書館のカウンターで本の貸し借りをする人」というイメージを持っている人がほとんどであり、その都度、「司書」の専門的な業務が社会的に認知されていないという課題を突き付けられます。

私は、大学一年次から司書課程で学び、今年度の夏、武蔵野音楽大学図書館で実習をさせて頂きました。現在は司書採用を目指すという道を選ばず、一般企業への就職を考え活動をしています。今回、中村百合子先生から、実習まで司書課程を受け、立教大学司書課程へのアドバイスを文章にしてほしいとのお話を頂いた時、私が書けることは何だろうと考えました。その結果、公共図書館ではない特殊な図書館で実習をさせて頂いて見えてきたことが書けるのではないかと思いました。

そこで、本稿では、実習を中心に据え、司書課程での学びを振り返りながら、司書課程の教育について、現在の私の意見をまとめていきたいと思います。

まず初めに、実習参加の意義について述べたいと思います。司書資格は、実習に参加しなくても取れることになっていますが、私は実習に参加する事を強くお勧めします。実習は、講義で学んできた、情報を検索し利用者に提供する方法の実践を行うだけではありませんでした。現場を司書側から見て、感じて、考えることで、「図書館概論」から考え続けてきた「図書館の社会的役割」や「司書とは何か」という問い、そして「図書館」「司書」を取り巻く社会環境に、新しい視点を持って向き合うことが出来る契機となるのです。そして、この事は、司書という道を選ぶ、選ばない関係なく司書資格を取ろうとする人間が考えるべきだと思うのです。

では、実習を経て、どのような事を学ばせて頂いたのかを述べていきたいと思います。先程も述べた様に、私は今年度の夏、武蔵野音楽大学図書館（入間図書館）で、実習を受け入れて頂きましたが、武蔵野音楽大学図書館での実習は、大きく二つのことが一般の公共図書館での実習と異なっていました。

まず一点目として、音楽大学という専門性の高い図書館であったということです。そこに所蔵されている資料も、非常に特徴的でした。図書は、通常と比べ、音楽書が非常に高い割合を占め、その他の一般書も芸術関連のものを中心に揃えられていました。また、特殊資料として、声楽曲、器楽曲、パート譜、総譜など、演奏形態、用途、出版社が異なる様々な楽譜や、レコード、CD、DVD など多様な AV 資料が所蔵されていました。

当然、それらを NDC の 760 だけで分類する事は不可能であり、武蔵野音楽大学図書館には、MDC（Musashino Decimal Classification）という独自の音楽書、楽譜の為の分類表が存在し、私は、その内容を把握することから実習を始めました。

二点目は、閉架式の図書館であった事です。ブラウジングで目的の内容の本を複数探す事、それらを手に取って、比較する事が出来ない閉架式では、レファレンスや、図書館員の経験に基づいたサポートによってそれらを補う必要があります。事前に歌のキーを確認したり、複数の版を持って来たりと、開架式とは異なった図書館員の方々のサービスが見えました。

実習での毎日が新しい発見、学びの連続で、大学での司書課程の学びだけでは現場の実情のほんの少ししか理解しきれていなかった事を突き付けられました。図書館の限られた空間の中で利用者のニーズに応え、情報やサービスを提供するために、流動的に図書館が変化し

続けていること。そして、アウトソーシングが主流となった昨今、書誌データもNACSISから利用できるということ。それによって司書に、付加価値を付けることが求められていること。これらが実習で得た大きな学びです。

講義で学んだことが全てでなく、司書は、図書館を取り巻く環境によって、柔軟に対応し続けている、ということは大学内にいたのでは実感することが出来なかったことです。

しかし、逆の捉え方も出来るのではないでしょうか。つまり、様々な図書館を、大学内の講義で実感し、学ぶ機会があってもいいのではないかと思います。選択科目「図書館基礎特論」では、現場の写真を用いて世界の図書館事情について学び、大学を出て豊島区中央図書館を訪れるなど、多様な図書館の在り方を知り、考えることが出来ましたが、その他の講義は、多様な図書館の具体的なイメージを持ちにくいものでした。

自分の知っている図書館以外の現状を理解するという事は、自分の考える図書館像、司書像を見つめなおすという事だと考えます。司書資格をとっても、司書の仕事に就く人の方が少ないこの現状の中で、専門的なスキル、知識の他に、司書課程に求められていることは、図書館や司書の現状を正しく理解してもらう事ではないでしょうか。私自身は、司書課程での学びを通して、信頼性の高い情報を得る為の手段はもちろん、利用者（情報提示の相手）の為に、真摯に向き合い思考し続ける、また、情報の根拠をきちんと提示する、といった万事に通ずる姿勢を身につけることが出来たと思っています。しかし、それに比べて図書館、司書の現在の姿や取り巻く環境について、考えたり学んだりすることは、この司書課程においてしっかり学んだとは正直言い難いと思います。

具体的には、実習の前に何回か様々な方式の図書館がある事を実践や見学を通して学ぶ機会を何回か設け、実習を経て、学んだこと、感じたことを、実習後、履修者で共有し、議論しあう事が出来る場があると良いのではないでしょうか。現在も、実習前後に共有、議論の場は設けられていますが、物足りなさを感じます。折角、一人一人が違う経験をしてきたのだから、その多くを共有し、それぞれの糧にできるまで議論する。そういった事が出来れば、「司書とは何か」「図書館の社会的役割」について、それぞれが自分なりの意見を深めることが出来ると思うのです。そして、そういった人間を、司書課程から輩出することは、社会的認知が低い司書の仕事について、少しでも多くの人に知って頂くことにつながるのではないでしょうか。

繰り返しになりますが、その為には、やはり何よりも一定期間現場を経験する実習参加が不可欠だと思います。現在、実習参加率が低い理由としては、先修科目が取り終わらない事（申込みを忘れるも含む）、司書資格が実習に参加せずとも取れる事、そしてなにより、毎年時期が変動し、インターンシップを強く推奨する近年の就職活動、留学など、私たちを取り巻く様々な事情の為、３、４年次の夏の十日間を実習で埋めるというのは、日程的に不安が多い、という事が挙げられると思います。実際、今年度の実習参加者は３年４年合わせて７人でした。実習させて頂いた身としては、非常にもったいない事だと思います。私もイレギュラーな日程でしか実習参加できない事情があり、参加を諦めようとしていましたが、中村先生に多くのご助力を賜り、武蔵野音楽大学図書館の方々のご厚意によって実習させて頂きました。中村先生、武蔵野音楽大学図書館の方々には、本当に感謝してもしきれません。様々な事情に不安がある方でも、少しでも実習に参加したいという意欲があるのであれば、どこかにチャンスとご縁があるのではないかなと思います。最後になりますが、私の先例がこれから実習に行かれる方の助けに少しでもなれば、と祈っております。